【8】インド古典に記されたルート

本稿は「原始仏教時代の通商・遊行ルート」を表題とする。「原始仏教時代」とは換言すれば「釈尊時代」ということになるが、このような曖昧な表現を避けるとすれば、「原始仏教聖典による」ということになる。インド古代の諸文献の中で、もっとも釈尊の時代あるいはもう少し範囲を拡げれば原始仏教時代のもっとも豊富な通商・遊行ルートのデータをもつのが原始仏教聖典であるという認識のもとに成り立っているわけである。

そのなかでも長い距離の、経由地を各駅停車的に記録しているという意味で、「原始仏教聖典における通商・遊行ルートの三大データ」と呼んでよいのは、第１に *Suttanipāta* の第５章 *Pārāyanavagga* に記されるバーヴァリン（Bāvarin）の 16 人の弟子たちが Godhāvarī 川の岸辺から釈尊を求めて王舎城まで旅したルートのデータであり (1)、第２は「律蔵」波羅夷罪第１条の釈尊が Verañjā から Vesālī まで遊行したルートのデータであり (2)、第３は『涅槃経』に描かれる入滅直前の釈尊が王舎城から Kusinārā まで遊行したルートのデータである (3)。

これらはすでに【2】において紹介したのでここには繰り返さない。ここにインド古典というのは原始仏教聖典以外の古典という意味である。

(1) 【2】の基礎データの［9-❶］-01 を参照されたい。
(2) ［6-❺ ］-01、[3-㊹]-01、[3-㊿]-01 を参照されたい。
(3) [8-❶]-01、[7-❶]-01～04、[6-❷]-01、[6-❸]-01、[4-⓫]-01 を参照されたい。

［1］『インド誌』の記すルート

そのひとつが『インド誌』であって、ここには次のような記述がある。

> 西から東へパリンボトラ（原訳者註：パタリプトラ）市にいたる長さの方は彼の記述によると、「スコイノス」〔単位〕で測った結果は――王の道が走っているからのことだが――、延長およそ１万スタディア〔約 1,776 キロメートル〕になるのである。それから先のことになるとこれはもう、それ程正確ではない。ただ俗に言われるところを記録してきたかぎりのひとは、大洋に突き出ている岬の部分もふくめ、〔奥行きはさらに〕およそ１万スタディアに及ぶと伝えている。そうなるとインドの〔東西の〕長さは実に、約２万スタディア〔約 3,552 キロメートル〕にも達することになるだろう。三-4～5（p.234）

このなかの「王の道」について、訳者の大牟田章氏は「rājamarga（ママ）あるいは rājapatha。ストラボン（15・1・11（689））所引のメガステネス（F.6c）によれば、マウリヤ朝時代、王都パタリプトラと北西地方、おそらくはインドス川渡河地点（アトック）とを結んで建設された公道。里程が計測されて道標、宿駅の制も整備されていたという」と註記している (1)。

Attock はパキスタンの Panjab 州 Attock district にあり、Taxila から西約 40km ほどのところである。したがってチャンドラグプタ時代には Patna から Taxila あたりまで「王の道」が走っていたということになる。『インド誌』の作者は、東の方については「それから先のことになるとこれはもう、それほど正確ではない」というから、道路をふくめてよく解らないということであろうが、この王の道はさらに東に伸びていたのである。

管見するところ、インド古典にはこれ以外に具体的なルートに関する記述は見いだせない。

（1）下・p.389

［2］『実利論』の記すルート

『実利論』には、「北路」と「南路」が記されている。

［2-1］これも本来は具体的な道をさしたようであるが、bahuvrīhi 的にぼんやりと「南の地域」「北の地域」を意味しているようにも見える。

陸路の場合は、「ヒマラヤ路（haimavata 北路）の方が南路（dakṣiṇāpathā）よりもすぐれている。象・馬・香・象牙・銀・金のような商品は、非常に高価であるから」と学匠たちは述べる。Ⅶ-12-116-(22)

「それは正しくない」とカウティリヤは言う。Ⅶ-12-116-(23)

毛布・皮・馬のような商品を除けば、螺貝・ダイヤモンド・宝珠（マニ）・真珠・金などの商品は、南路においてより豊富であるから。Ⅶ-12-116-(24)

南路の場合も、多くの鉱山があり、高価な商品があり、周知のルート（prasiddhagati）であり、わずかな出費と労力しか要しない商路の方がすぐれている。あるいは、低価の商品しかなくとも、多くの市場のあるものがすぐれている。Ⅶ-12-116-(25)

という。「北路」は‘haimavata’と表現されているからヒマラヤ山麓に至る道をいうのであろうが、実際にどのようなルートを指しているのかわからない。しかしこの記述はマウリヤ帝国の首都 Pāṭaliputra が中心となっているとすれば、Pāṭaliputra からヒマラヤ山麓に至る道ということになるであろう。

同様に「南路」もよくわからないが、螺貝や真珠など海に産する貴金属が取り上げられているところをみれば、アラビヤ海の沿岸の町と Pāṭaliputra を結ぶ道と解釈することができるかもしれない。

また、

東西の商路（pūrva paścima ca vaṇikpatha）も、これに準じて説明される。Ⅶ-12-116-(26)

とするから東南を結ぶ道もあったことはいうまでもない。これは前項に書いた『インド誌』の「王の道」に相当するかもしれない。またこの東西は Pāṭaliputra を中心としているのであろうから、この道は Pāṭaliputra よりも東にまでつながっていたことになる。

［2-2］この北道と南道をいうものであるかどうかわからないが、ロミラ・ターパルの『国家の起源と伝承』のなかには次のように記されている。

「**北道**はヒマラヤ山脈沿いの道で、後にガンダック河に沿って南下する道となった。これ

に対して**南道**はヴィンディヤ山脈のいくつもの支脈をヤムナー河・ガンジス河の南岸に沿って通じている道で、パータリプトラ辺りでこの２本は交わった」(1) とする。

この記述では南道がどのようなルートであったかイメージすることができないが、他の箇所には、「ダクシナーパタ、すなわちウッジャインを通過して南下する『南道』については、ナルマダー川近くで分岐すると見る説とプラティシュターナ（パイタン）まで延長されていると見る説があるが、いずれにせよガンジス河と西海岸とを連結する目的をもつものであった」(2) とされているから、著者は南道とはヤムナー河・ガンジス河の南岸に沿って、ウッジャインを通り、アラビヤ海の方に通じている道と理解していたのであろう。そうとすれば南道は『インド誌』のいう「南道」と一致するといってよいであろう。なお西海岸にはブリグカッチャ（バールカッチャ）港とソーパーラ港があったとしている(3)。

ロミラ・ターパルが北道は、「後に Gandak 河に沿って南下する道となった」とする「後に」がいつのことかわからないが、前項に記したように『インド誌』の北道はパータリプトラに通じていなければ意味がないとすれば、『インド誌』の北道は舎衛城あたりからヒマラヤ山脈の山麓沿いに東行し、Gandak 河にぶつかるところで南下するルートということになるであろう。

(1) p.097。ほかの箇所 p.135 にも同趣旨のことが書かれている。
(2) p.137
(3) p.136

［3］中国求法僧の旅ルート

次にインド古典とは呼べないが、中国の求法僧の旅行記も調べておこう。

［3-1］まず第１には『高僧法顕伝』に記されている法顕のインド求法のルートを紹介する。ただしここにはこの論文が主題とする範囲しか扱わない。またここには東西南北の方角やら距離やらが記されているが、ここには地名のみを掲げる。地理的関係については『東洋文庫』の p.138 と 139 の間に地図が差し込まれているのでこれを参照されたい。地名には（　）のなかにパーリ語に相当する地名があればそれを記入し、またそれが基準地であれば太字とする。

ちなみに法顕は弘始元年（西暦 399）に長安を出発し、義熙８年（西暦 412）に青州の海岸に帰着した。

（中央アジアを経て）西北インド

烏長国……宿呵多国……揵陀衛国……竺刹尸羅（**Takkasilā**）……弗楼沙国……醯羅城……那竭国……羅夷国……跋那国……毘荼国……

中国

摩頭羅国（**Madhurā**）……僧迦施国（**Saṅkassa**）……罽饒夷城（**Kaṇṇakujja**）……沙祇大国（**Sāketa**）……拘薩羅国舎衛城（**Sāvatthī**）……迦維羅衛城（**Kapilavatthu**）……論民園（**Lumbinī**）……藍莫国（Rāmagāma）……拘夷那竭城（**Kusinārā**）……毘舎離国（**Vesālī**）……摩竭提国巴連弗邑（**Pāṭaligāma**）……那羅聚落（**Nālandā**）……王

舎城（**Rājagaha**）……伽耶城（**Gayā**）……苦行六年処（**Uruvelā**）……（再び）巴連弗邑……曠野（**Āḷavī**）……迦尸国波羅榛城（**Bārāṇasī**）……拘睒弥国（**Kosambī**）……（さらに再び）巴連弗邑……

東インド

瞻波大国（**Campā**）……多摩梨帝国……（師子国に行って帰国の途につく）

［3-2］次に玄奘の『大唐西域記』における玄奘のルートを紹介する。諸事は前項に倣う。地理的関係は巻末に付された「『大唐西域記』玄奘紀行図」を参照されたい。

ちなみに玄奘は貞観 3 年（西暦 629）に長安を出発して、同 19 年（西暦 645）に長安に帰着した。

（中央アジアを経て）北インド

濫波国……那揭羅曷国……醯羅城……健馱邏国（国の大都・布路沙布邏城）……布色羯邏伐底城……跋虜沙城……烏鐸迦漢荼城……婆羅覩邏邑……烏仗那国……鉢露羅国……呾叉始羅国（**Takkasilā**）……僧訶補羅国……烏剌尸国……迦湿弥羅国……半笈嗟国……曷邏闍補羅国……磔迦国……至那僕底国……闍爛達邏国……屈露多国……設多図盧国……

中インド

波理夜呾羅国……秣菟羅国（**Madhurā**）……薩他泥湿伐羅国……窣祿勤那国……秣底補羅国……婆羅吸摩補羅国……瞿毘霜那国……悪醯掣呾邏国……毘羅那拏国（**Verañjā**？）……劫比他国（**Saṅkassa**）……羯若鞠闍国（**Kaṇṇakujja**）……阿踰陀国（Ayojjhā？、**Sāketa**？）……阿耶穆佉国……鉢邏耶伽国（**Payāgapatiṭṭhāna**）……憍賞弥国（**Kosambī**）……迦奢布羅城……鞞索伽国（**Sāketa**？）……室羅伐悉底国（**Sāvatthī**）……劫比羅伐窣堵国（**Kapilavatthu**）……臘伐尼林（**Lumbinī**）……藍摩国（Rāmagāma）……拘尸那揭羅国（**Kusinārā**）……婆羅痆斯国（**Bārāṇasī**）……戦主国……阿避陀羯剌拏僧伽藍……摩訶娑羅邑（**Āḷavī**？）……吠舎釐国（**Vesālī**）……弗栗恃国……尼波羅国……蘇摩補羅城（波吒釐子城　**Pāṭaligāma**）……鞮羅択迦伽藍……伽耶城（**Gayā**）……菩提樹（**Uruvelā**）……矩奢揭羅補羅城（**Rājagaha**）……那爛陀僧伽藍（**Nālandā**）……伊爛拏鉢伐多国（**Maṅkulapabbata**）……瞻波国（**Campā**）……羯朱嗢祇羅国（**Kajaṅgala**）……奔那伐弾那国（**Puṇṇavaddhana**）……

東インド

伽摩縷波国から東インドと南インドの国々を経て、

南インド

摩訶剌侘国（アジャンター石窟）……跋祿羯呫婆国（**Bhārukaccha**）……摩臘婆国……阿吒釐国……契吒国……伐臘毘国……

西インド

阿難陀補羅国……蘇剌佗国……瞿折羅国……鄔闍衍那国（**Ujjenī**）……擲枳陀国……摩醯湿伐羅補羅国から再び瞿折羅国を通ってインダス河の河口にいたり、インダス河を溯って西北インドを経由し、中央アジアを通って帰国の途についている。